

3 教科指導

	重点目標	具体的目標	具体的方策	評価		
教科指導 (国語)	学力向上	わかりやすい授業を実施する。	授業進度、指導内容等を、綿密に打ち合わせる。	A	A	A
			適宜、相互に授業見学等を行い、資質の向上に努める。	B		
		基礎学力を向上させる。	学習到達度確認問題（小テスト）で80%以上の合格を目指し、基礎事項を定着させる。	B	A	
			休日講習や、長期休業中の補習を行うとともに、適切な課題等を与える。	A		
		実践力を養成する。	各学年部と協力して、小論文の添削指導、読書指導を行う。	A	A	
			過去の入試問題を研究させ、解説を加える。	A		
教科指導 (地理歴史・公民)	学力向上	学年、科目に応じたきめ細かい指導を行う。	授業展開を工夫することにより、生徒の関心を喚起する。	A	A	A
			学習到達度確認問題（小テスト）の合格率を80%以上とする。	B		
		大学入試に対応できる学力を養成する。	進研模試（2年11月）の各科目の平均点偏差値が、45～50以上になるようにする。	A	A	
			大学入試共通テストの各科目の校内平均点が、全国平均点を上回ることを目指す。	B		
教科指導 (数学)	学力向上	充実した授業を行う。	幅広い学力に対応した授業展開や指導法を考え、授業の資質向上を目指す。	B	B	B
			個々の生徒に応じて指導する。	基礎的、応用的な内容の補習等の計画をふまえ、ねらいをもって実施する。		
		基礎から応用まで幅広い学力を養成する。		個々の生徒に応じた課題を工夫する。	B	
			学習到達度確認問題（小テスト）や反復練習などで計算力の向上と基礎的・基本的内容の理解と定着を図る。	B		
		実戦問題を通して、応用力を養成する。	B			
		教科指導 (理科)	学力向上	授業内容を充実させる。	実験、観察を取り入れ、知的好奇心を引き出す。	
ICT機器を活用し双方向対話型授業を行い、生徒同士の意見交換を活発にさせる。	A					
進路希望達成に必要な学力を養成する。	学習到達度確認問題（小テスト）で、平均得点80%、合格率80%を目指す。	B		B		
	実験や考査の工夫を通して共通テストに必要な学力を養成する。	C				
教員研修を実施する。	理科教員間で相互に授業を参観し、授業に関する資質向上を図る。	A		A		
	教科会で、科学最新事情や入試問題についての情報交換を行う。	A				

	重点目標	具体的目標	具体的方策	評価		
教科指導（英語）	学力向上	個々の進路実現に必要な学力を養成することをとおして、英語を用いてグローバル社会に貢献する人材を育成する。	3年次において、大学入学後まで見据えた、総合的な英語力のさらなる育成を目指す。	A	B	B
			2年次において、大学入学後まで見据えた、総合的な英語力の育成を目指す。	C		
			1年次において、英語における基礎力の養成を目指す。	B		
		実用的な英語運用力を養成する。	3年次において、英語の科目間の連携を図り、4技能のバランスのとれた英語力を養成し、6割以上の生徒が英検2級以上を取得、またはCEFRでB1であることを目指す。	A	B	
			2年次において、英語の科目間の連携を図り、4技能のバランスのとれた英語力を養成し、4割以上の生徒が英検2級以上を取得、またはCEFRでB1であることを目指す。	B		
			1年次において、英語の科目間の連携を図り、4技能のバランスのとれた英語力を養成し、7割以上の生徒が英検準2級以上を取得、またはCEFRでA2であることを目指す。	B		
	教員の教科指導力を養成する。	教員相互で授業参観を行い、技能や知識の共有を図る。	基本的に英語で授業を行う。	B	B	
			校内・校外研修の協議会や報告会を行い、より効果的な指導法を探り、実践する。	A		
				B		
	教科指導（保健体育）	体力・健康の増進および運動量の確保	運動を通して体力と気力、他者と協力する態度を養う。	体力づくり運動として持久走トレーニングを多く取り入れ、国際大学までの往復走（5km）を行う。	A	B
毎時の準備運動の中で補強運動（体力づくり運動）を実施し、体力・筋力の向上と他者との協力・協働、コミュニケーション能力の向上を図る。				B		
授業規律の確保および公正、協力、フェアプレイの態度を育成する。			天候や体調等に合わせた体操着を正しく着用させ、身だしなみを整えることの大切さを意識させる。（腰パン・シャツ出し不可）。	A	A	
			授業における準備や後片付けなどを協力して行わせる。	A		
競技や運動の特性に合わせて、楽しく運動する。			運動の技術・技能を向上させるとともに、種目選択を通して運動の楽しさと喜びを体験させ、より主体的で継続的な取り組みを促す。	A	A	
成果		授業面だけではなく、校務においても生成AIを活用するなど、ICTを活用することによる教育活動の活性化・充実を図ることができた。 一方、業務に偏りがみられるので、分掌内での業務の平準化、各業務での役割の明確化を一層進めることが必要である。	総合評価			
			A			